中世の笑い

鈴木棠三

秋山書店

中世の笑い

鈴木棠三

秋山書店

鈴木 棠三（すずき とうぞう）

略　歴

明治44年、静岡県に生れる。昭和9年、国学院大学国文科卒業。昭和12年、国学院大学研究科修了。

折口信夫・柳田国男先生に師事。後、大学講師・文筆で活躍。

編・著・校訂書

『ことば遊び辞典』『近世紀行文芸ノート』『相合い傘』『藤岡屋ばなし』『藤岡屋日記』『江戸・東京風俗史料』など多数。

中世の笑い

平成3年12月 5日　第1刷印刷
平成3年12月13日　第1刷発行

著　者　© 鈴木棠三
発行者　秋山欣三
印刷所　三秀舎
製本所　渡辺製本

〒180 東京都武蔵野市桜堤1－1－8－302
発行所　秋山書店
☎0422（53）2283／振替　東京1－21347

ISBN44－87023－540－4 C0095

中世の笑い

目　次

俳諧歌とその周辺……五
——中世以前の俳諧——

★★★

連歌の熱狂とその行方……四一
犬つくば集と山崎宗鑑……四四
犬つくばの世界……六九
連歌と笑話……一九八
落書と落首……二二四
古俳書と私……二二九

★★★

僧院の笑話……二三五
——安楽庵策伝と醒睡笑——

あとがき……二九七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

中世の笑い

鈴木棠三

秋山書店

中世の笑い

中世の笑い

中世の笑い

鈴木棠三

秋山書店

俳諧歌とその周辺

――中世以前の俳諧――

一

この本は、俳諧連歌を中心とする滑稽な挿話を語るのが目的であるが、俳諧連歌といっても理解してくれない人が多い。原稿をまとめて出版社へ持込んでも、どうもと言って断られてしまう。どのようにして売ったらいいか分らないので、とも言われた。つまり、編集者が俳諧連歌を知らない、だから編集会議へ提出して、同僚や上司に説明する自信がない。改めて勉強する気持もない。

俳句は大流行で、俳句人口何百万とかいう現状だというのに、その原流である俳諧には無関心である。文学史なんか知らなくても、いい句は出来ると、たかを括っているのであろう。或いは、なまじ文学史などに首を突込むと、貴重な創作力が鈍る、なんて思っているのかも知れない。度し難いハイジンだ。シツレイ。

なるほど、俳諧を説くことは楽ではない。読まされる側も気が重いであろう。だが、本書の内容は俳諧そのものではなくて、俳諧の連歌である。決して面倒なものではない。

もっとも、その連歌というやつが苦手で、と言われる向きもあるであろう。なる程、正式の連歌と

なると、いわゆる式目（しきもく）といって、いろいろなきまりがある。多くは禁止項目だ。そんな制約に縛られるのはごめん。つまらぬことに拘泥するのは、害あって益なしだと考えてしまうのに相違ない。かくいう私も、連歌のべからず集は読みたくない。これは実作者には必要な心得であるが、鑑賞者は知らなくても済むはずだ。

そこで、一般の俳諧・連歌に無関心な方々のために、一応の下準備をしておかないと、本書など手にも取って貰えないことになろう。そういう売らんかなの魂胆から、以下の道案内を草することにした次第である。

まず俳諧とは、滑稽と同意語だと心得ていただく。ああそうかと、簡単に分かって下さる向きは、却って心元ない。すぐその下から忘れて、そっぽを向いてしまうからだ。むしろ、なぜ滑稽の意味なのだと、反問して頂ければ、少し手ごたえを感ずる。

そういう向き向きのために、啓蒙以前の水準の低いところから話を始めることにする。

俳諧という語が使われた始めは、文学史的には、勅撰集の最初、古今和歌集である。巻十九を「雑体」に宛て、諸種の詩形のウタを分類して揚げ、その一つに「誹諧哥」がある。俳諧歌でなく、誹諧哥とあるのである。誹という漢字の音はヒで、ハイとは読まない。意味は、「そしる」である。誹諧（ひかい）という熟字もあるが、おどけてわる口をきく意味である。辞書には、『北史』文苑、柳誓伝の「性嗜レ酒、言誹諧、由レ之弥為二太子所二親狎一」という文章を引いてある。『北史』は、中国の正史の一つで、北朝（魏・斉・周・隋。四～七世紀）の歴史を記したもの。唐の李延寿（生没年不詳。七世紀の人）が、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

父李大師の遺業を継いで完成した。右の引用文は、和刻本『北史』には「言雑誹諧」とある。薬のきいた諧謔を雑えるとの意になろう。

俳諧の俳については、たわむれ・おどけ・わざおぎ・うそぶくなどの意味があり、俳諧については字書には、やはり同じ『北史』の李文博伝の「好為二俳諧雑説一、人多愛二狎之一」とある文を引いている。

だから、俳諧でも誹諧でも同じようなものといえば言える。古今集の誹諧歌の源流を万葉集の嗤笑歌に求める説もあって、それらの嗤笑歌の中には、親しさの余り身体的特徴をあげつらった人身攻撃的な歌も見られるから、誹諧歌と書く方がむしろ適当だともいえる。とすればヒカイカである。俳諧歌と書くべきところを、古今集の撰者がうっかりして誹諧歌と書いてしまったため、後来の勅撰集の撰者たちが、右へならえ式に誤りを犯したのだと従来は考えられて来たが、その誤りは字面の誤りでなく、読み方の間違いだったということになろう。

とにかく、古今集の誹諧歌は、ハイカイカと読まれ、これが後世の規範とされて来た。そしてこの流れがハイカイレンガにまでも続くのである。今さら、ハイカイカでなくヒカイカであったと論じても、追っ付かないわけだ。ここには「誹諧歌」のまま、以後の勅撰集を見渡すことにしよう。

勅撰集には、八代集、十三代集、合わせて二十一代集ある。つまり二十一種の勅撰集（その後に、南朝の『新葉集』があるが）が、作られたのである。それらの集の全部が、古今集を手本にして編集されているのであるが、ただし「雑体」を設けた歌集は少く、大部分は「雑体」の部を設けないものが多い。これは撰進当時の歌壇の趨勢を反映しているので、下命者の天皇の好みもあろうし、撰者の主

張にもよる。

誹諧歌を一部門として立てている集では、それと共に長歌（古今集では「短歌」とある。これもこの集の誤り）・旋頭歌・物名歌（折句・沓冠を含む）なども併載するのが不文律である。長歌はとにかく措くとして（引例が長くなるのも困る）、旋頭歌・物名歌については、これらは言葉遊びの歌であり、戯歌という点では俳諧に通ずるものがあるので、俳諧歌と共に見て行くことにするつもりである。

二

わが国の文芸には、古くから笑の流れがある。万葉集の巻十六には、相手の人物をわらい物にして楽しんでいる歌がある。

池田朝臣の、大神朝臣奥守を嗤ふ歌一首

寺々の女餓鬼申さく大神の男餓鬼賜りて其の子生まはむ

これに対し、大神朝臣がやり返した歌（報へ嗤ふ歌）がある。

仏造る眞朱足らずは水たまる池田の朝臣が鼻の上を掘れ

池田朝臣の歌の大意は、寺の女餓鬼が言うことには、大神の男餓鬼を夫にして、子供をどしどし生んでやろう。つまり、池田朝臣よ、あなたは女餓鬼とお似合だ。いっしょになったらさぞすごい子らが生れることだろうという意を歌っているわけだ。

池田朝臣もへこんではいない。そっちがお寺で来るなら、こっちも仏様で行こう。仏様を造るのに赫土が足りない場合は、池田朝臣の水鼻のたまった赤鼻の上をほじって（そうすればいよいよ水がた

まるだろう)、赫土をうんとこさ掘出して使ってやろう。

このやり取りを始めとして、平群朝臣が穂積朝臣を嗤う歌、穂積朝臣がこたえる歌がある。一方が腋臭(腋毛、或は腋臭)だとやっつければ、一方は赤鼻の上を掘れと返報する。どうも人身攻撃が露骨だ。子供のけんかのせりふのようで、ユーモアという点では上等といえない。

嗤笑歌というくらいだから、かなり心に含む所があって、あざけりわらう気持を和歌の形にしたもの、哄笑的ではなく、悪意が感ぜられるものでもある。

また「心の著く所無き歌」というのもある。ナンセンスな歌とでも訳すべきか。

吾妹子が額に生ふなる雙六の牡牛の鞍の上の瘡

わが背子が犢鼻にする円石の吉野の山に氷魚ぞさがれる

吾妹子の額に生えている雙六の、大きな牡牛の鞍の上の腫物はすごいもんだ。

吾が背子が犢鼻褌にするまるい石の、吉野の山に氷魚がぶら下がっている。

これを具象化するとどういうことになるのか。円石は睾丸をさしているらしいが、要するにナンセンス和歌である。右の二首は、舎人親王が、由る所無き歌を作ったら、褒美をやろうと言ったので、大舎人安倍朝臣子祖父が作って奉り、二千文のご褒美を頂いたとある。

先の嗤笑歌やその他、僧を嗤う歌、痩せた人を嗤う歌など、人身攻撃の傾きが濃厚で、戯れにわらうという気分がむしろ稀薄である。それも戯れだろうが、余程神経が太い人だ。これに比べると、由る所無き歌の方はナンセンスな滑稽を目途して作って居り、でたらめぶりが面白い。嗤笑歌が自然発生的だとすれば、無心所着歌は創作である。文芸の上で滑稽を志す意途が生れたことを示していよう。

また、高宮王の「数種の物を詠む歌」は、

莨菪に延ひおぼとれる屎葛絶ゆることなく宮仕へせむ

で、数種の物としては数が少く、その点ちょっと羊頭狗肉の感があるが、カワラフジにせよクソカズラにせよ、繁殖力の旺盛な植物にたとえて、末長く宮仕えをしようというので、下句がまじめなだけに、比譬が露悪的でおかしい。これも目途した滑稽で、このようにして笑の歌が生れ育って行ったのだと分かる。

さて、ちょっと繰り返しになるが、勅撰和歌集の第一号『古今和歌集』（九一四までに成る）に、もう一度触れることにしよう。この集は巻十九を「雑体」の歌にあてている。その雑体に、もう一度触れることにしよう。雑体というだけあって、歌体はいろいろである。

まず最初は「短歌」が五首ある。短歌といっても、実体は長歌で、五七五の句を繰返し（句数は一定せず）最後を七七で結ぶものが四首、ほかに三十一文字の本来の短歌が一首ある。長歌をもって短歌と題したのは、要するに誤りであるが、どうしてこんな誤りを犯したのか後世弁護した説もあるが、誤りは誤りだ。

長歌の次に旋頭歌四首。旋頭歌は万葉集には六十二首もある。五七七・五七七の六句の歌で、古事記・日本書紀の問答歌には、五七七の問に五七七で答えた二首一対の形のものがあり、これが旋頭歌のはじめである。同じ問答歌であっても、後に述べる短連歌とは詩形が異るのである。

雑体の最後が「誹諧歌」で、五十八首ある。すでに述べたように、誹諧歌と記したのは、俳諧歌と記すところを誹諧歌と記した誤りか、或いはヒカイカとよむべきをハイカイカと誤解したのか、とに

かく字面か読み方かで誤りを犯しているわけであるが、古今集が第一の勅撰集であるところから、それに続く勅撰集で、ハイカイカの部立を立てた集はすべて誹諧歌と記す誤りを繰返し、これが連歌の世界にも受け継がれ、誹諧連歌と書かれるようになった。

古今集の誹諧歌は、滑稽の和歌としては微温的で、むしろ優雅である。

梅の花見にこそ来つれ鶯の人く人くといとひしもをる　　よみ人しらず

いくばくの田をつればか郭公しでのたをさを朝な朝なとふ　　藤原敏行

第一首は鶯の異名を人来鳥と呼ぶことを、常識的に心得ている者にとっては、しゃれにもならぬであろうが、当時は「人来」が新鮮に聞えたのであろう。第二首の方が滑稽としての作為はまさっていよう。

なにをして身のいたづらに老いぬらむ年の思はむ事ぞやさしき　　よみ人しらず

この歌などは、後世になれば俳諧でも何でもない、普通の和歌、述懐歌にすぎない。俳諧が、次第に度ぎつくならねば、その特色を主張できぬようになるゆえんである。

古今集では、滑稽歌ではないが、文学遊戯の歌が一つの部立となっている。巻十の「物名」で四十七首、一巻をあてている。物名は、もののな、ぶつみよう、ぶつめいなどと読む。課題の物の名を歌中に詠み込むもので、すでに万葉集にも見られる。

境部王、数種の物を詠む歌一首

虎に乗り古屋を越えて青淵に鮫取り来む剣太刀もが

作主不レ詳歌一首　　（巻十八）

なし棗きみに粟つぎはふ葛の後もあはむと葵花咲く　（巻十八）

境部王の歌は、虎・古屋・青淵・鮫（さめともよむ）・剣太刀の五種を詠んでいるが、後世のような隠題にはなっていず、道具だてが多いというだけである。作者不詳の一首も梨・棗・黍・粟・葛・葵の六種だが、前の歌より手が込んでいる。「粟つぎ」に、逢ひ続ぎの意を含ませて、葛の蔓のように長く逢うという序歌の役目をさせ、あはむとの音の相似を以て葵を引出している。

このような技巧は、じきの間に発展するものである。物の名をそのまま生の形で詠み込んだのでは面白くも何ともないので、それがルール違反扱いとなる。そこで同音異義の語を利用したり、また句跨がりにしてはめ込むなどの工夫を凝らすことになる。次にあげる古今集の物名歌にはその技巧が著しく見られる。

ほととぎす　藤原敏行朝臣

くべきほどときすぎぬれや待ちわびて鳴くなる声の人をとよむる

こうした遊びが昂じると、次の例のような物名歌の贈答、或いは、挑戦・応戦も行われる。

うつせみ　在原　滋春

浪のうつせみれば玉ぞ乱れける拾はば袖にはかなからむや

返し　壬生　忠岑

袂よりはなれて玉を包まめやこれなむそれとうつせ見むかし

次にあげるのは、物の名を指定せぬ課題。

はをはじめ、るを果てにて、ながめをかけて時の歌よめと、人の言ひければよみける

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.